第十篇第七章　原子爆弾とソ聯の参戦

一、原子爆弾

新型爆弾に依る廣島の惨害　ポツダム宣言は、日本が若し之を受諾しない場合には即時且一層怖るべき報復を加へるべきことを警告していたが、それは八月六日事実となつて現れた。廣島に対する原子爆弾投下がそれであつた。

廣島の当時の人口は三四三、〇〇〇であつた。直ぐ南方の宇品は永く陸軍の海運基地として使用せられ、又市の南東部にはかなりの補給廠倉庫があり、昭和二十年の四月には第二総軍司令部が設置されて陸軍とは関係の深い都市ではあつたが、軍需工場が比較的少い関係からか未だ無差別焼夷爆撃の目標からは除外された(1)。

0228

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

註(1)事実は原爆目標として残されていたのである。

八月六日の朝は蒸し暑いが快晴であつた。午前七時九分電波探知網は敵の少数機を捕捉して警戒警報を発したが、敵機は爆撃することなく廣島上空を旋回して飛び去つた。七時三十分警戒警報は解除され人々はその日の仕事を開始した。

八時、再び二機のB二九が標定された。ラヂオは警戒警報を発したが、敵機は偵察任務のものらしいと傳へた。人々は大したことはあるまいと考へて仕事や行動を続けた。二機のB二九は高々度から市の上空に進入したが爆撃が予期されなかつたので多くの人々は防空壕に入らないで敵機を見ていた。敵機の一機から落下傘の降りるのが認められた直後、目を潰す様な烈しい白い閃光と共に市の中央部に大爆発が

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

起つた。時刻は概ね八時十五分であつた。

忽ちにして市一面に煙と塵の大きな雲が立ちのぼり廣島は暗黑の物凄い幕に覆はれてしまつた。次で起きたものは數百の火柱であつた。廣島市は斯くして灼熱地獄と化して行つた。

日沒迄に餘燼のくすぶる廢墟となつた廣島の町は想像も出來ない程の凄慘な光景を呈していた。爆発の中心部に近い部分に居た多くの人々は死亡し、命からがら逃げのびた人々も火傷にうめいていた。全人口の内約七八一五〇の生命が失はれ、五一四〇八人が負傷し又は行方不明となつた。軍關係の損害は此の數字に含まれていないが比較的輕微であつた。總建物數七六、三二七の内約四八、〇〇〇が全壞、二二、一七八が半壞し罹災者一七六九八七人を算した。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

原爆第一号　廣島市の通信網が完全に破壊された為、東京に被害の第一報が到着したのは六日の午後であつた。最初の報告は簡単で且断片的であつたが、敵が未だ曾つてない破壊力を有する新型爆弾を使用したことは明瞭に判断された。

翌八月七日の早朝には「六日廣島に投下した原子爆弾は戦争に革命的な変化を與へるものだ。日本が降伏に応じない限り更に他の場所にも投下する」旨のトルーマン聲明(2)をのせた米國ラヂオが聽取された。その直後陸海軍中央部は、新型爆弾による被害についての稍々詳細な報告を廣島及長崎から受け取つた。

註(2)当時完成していた原子爆弾は二個であつたが、米國は日本に対する心理的效果を狙つて之を使用した。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

当時日本の当局者の多くは連合国及独逸が原子力の兵器的利用に就て研究を行つている事を知つていたが此の戦争中に完成されるであらうとは考へていなかつた。事実日本に於ても大東亜戦争間陸海軍によつて此の研究が極秘裡に行はれていたが昭和二十年始め頃、之が完成には莫大な費用と日子を要することが判明したので実験を打ち切られていた経緯もあつた。

状況右の如くであつたので、廣島に投下された爆弾が原子爆弾である可能性は認められたが、科学者の内にも疑問を表明するものもあり又連合側の宣傳かも知れないと主張する者もあつた。之が国民に対する発表に就て情報局と陸軍報道部との間に相当議論が戦はされたが結局公式の調査によつて事実を確認する迄は原子爆弾と言ふ言葉は使は

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ないことに落着き、八月八日の新聞は「廣島は新型爆弾により相当の損害を受けた」旨の七日附大本營発表を掲載した。

一方、參謀本部は八月七日、才二部長有末精三中將を長とし、原子エネルギーの最高権威者仁科芳雄博士、航空本部及陸軍軍医学校の関係者数名より成る調査委員を廣島に派遣した。一行は途中航空事故の為遅れ、翌八日午後漸くにして廣島に到着したが、直に新型爆弾は原子爆弾に外ならないことを確認して東京に報告した。

天皇の即刻終戦意図　右調査委員の報告が東京に到着する以前に東郷外相は鈴木総理と相談の結果、ポツダム宣言の迅速な受諾方を陛下に奉上することに決めていた。

東郷外相は八日午後、宮中の地下室に於て拝謁、原子爆弾に関する

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

敵側発表並に之に関連する事項を上奏したが、陛下よりとの種武器が使用せらるゝ以上戦争継続は愈々不可能となるにより、有利な条件を得んが為に戦争終結の時期を逸するは不可なり、条件を相談するも緩らざるに非るが成るべく速に戦争の終末を見る様努力せよとの御沙汰があり、又その旨を鈴木首相にも傳へる様命ぜられた。

仍て鈴木首相は直に最高戦争指導会議を開くことにしたが会議員の或者の都合が悪かつた為延期された。

三、ソ聯の参戦

驚くべき回答　一方、日本の指導者達は八月八日の真夜中（モスコー時間八日午後五時）に行はれる予定の佐藤大使とモロトフ外務人民委員との会見の結果を鶴首して待つていた。スターリンとモロトフ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は日本政府の予想より遙かに遅れて八月五日モスコーに帰還した。八佐藤大使は直に会見を申込んだが、モロトフは前記時刻を指定した。

ソ聯の皮肉にして驚くべき回答は宣戦であつた。過去約二箇月間の懸命の外交努力も今や水泡に帰したるのみならず更に鉄槌を加へられたのである(3)。

註(3)ソ聯の参戦はヤルタ協定の時に決まつていた。その時機はドイツの降伏後約三箇月とされていたが、ポツダム会議の際にはスターリンは八月下旬参戦を言明している。然るにその後日本が原子爆弾の為に降伏を急いでいることが判明したので参戦を早めた様である。尚ポツダム会議頃には米国もソ聯の参戦をあまり歓迎しない空氣になつていなたが、スターリンは米国より参

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

戦要求の手紙を出してもらい、その求めに応ずる格好で参戦している。

佐藤大使がモロトフより宣戦布告を受け取つている時、シベリヤの赤軍は滿洲の東部、北部、西北部及び西部の國境を突破して我關東軍に対して攻撃を開始していた。南樺太も亦同時に赤軍の進入を受けた。九日払曉にはソ聯機は滿洲北鮮の諸都市及び日本海上の日本船舶を攻撃したが、東京に於ける政府及び大本營は八月九日午前四時同盟通信社による次の如きタス通信の傍受に依つて始めてソ聯の行動を知つた。

ヒツトラー独逸の敗北及降伏後に於ては日本のみが戦爭を繼続する唯一の大國たるに至れり三國即ち米合衆國、英國及中國の日本軍隊の無条件降伏に関する本年七月二十六日の要求は日本に依り拒否せ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

られたり因て極東戦争に関する日本政府のソ聯に対する調停方の提案は全く其の基礎を失ひたり日本の降伏拒否に鑑み連合国はソ連政府に対し同政府が日本の侵略に対する戦争に参加し以て戦争の終了を促進し犠牲者の数を減少し且急速に一般的平和の回復に資すべく提案せりソ連政府はその連合国に対する義務に遵ひ連合国の右提案を受諾し本年七月二十六日の連合国宣言に参加せりソ連政府は斯る同政府の政策が平和を促進し各国民を此れ以上の犠牲と苦難より救ひ日本人をして独逸が其の無条件降伏拒否後嘗めたる危険と破壊を回避せしめ得る唯一の手段なりと思考す

以上の見地よりソ連政府は明日即ち八月九日より同政府は日本政府と戦争状態にあるべき旨宣言す

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

日本政府が公式にソ聯の宣戦布告文書をマリク大使より受領したのは翌十日の十一時十五分であつたが、事態は今や明白であつた。固より、ソ聯が何れは參戦する可能性の多いことは政府及び大本營の大部の者の判断しているところであつたが、此の様に突如たる參戦のもたらしたものは憤りと失望であつた。東郷外相の如きは、タス通信の報告を聞いてその眞疑を疑つた程であつた。今やソ聯を仲介として戦爭を終結させようとする日本の淡い最後の希望も完全に打ち挫かれてしまつた。

非望破摧企図　ソ聯參戦の報に接した大本營は全面対ソ防衛作戦の発動を準備すべく、八月九日左記要旨の命令を発した。

一、蘇国は対日宣戦を布告し九日零時以降日蘇及滿蘇国境方面諸所に於

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

て戦斗行動を開始せるも未だ其の規模大ならず

二、大本營は國境方面所在の兵力を以て敵の進攻を破摧しつゝ速かに全面的対蘇防衛作戦の発動を準備せんとす

三、第十七方面軍は關東軍の戦斗序列に入るべし

隷屬転移の時機は八月十日六時とす

四、關東軍総司令官は差当り國境方面所在の兵力を以て敵の進攻を破摧しつゝ速かに全面的対蘇防衛作戦の発動を準備すべし

右作戦の為準拠すべき要綱左の如し

・關東軍は主作戦を対蘇防衛作戦に指向し本土朝鮮を保衛する如く作戦す此の間南鮮方面に於ては最少限の兵力を以て米軍の来攻に備ふ

五、支那派遣軍総司令官は速かに一部の兵力及軍需品を南滿方面に転用

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

し得る如く準備すると共に蘇軍の来攻に方りては所在の兵力を以て之を撃摧すべし

六、関東軍と支那派遣軍間の作戦地境左の如し

小海関―大城子―タリ湖―ユクジュル廟一線上は支那派遣軍に含む

七、才五方面軍司令官は現任務を遂行すると共に差当り国境方面所在の兵力を以て敵の進攻を破摧しつゝ速かに全面的対蘇防衛作戦の発動を準備すべし

次で八月十日、政府の対ソ態度は未定であつたが、大本営はソ聯の非望破摧の為全面的作戦を開始するに決し左記要旨の命令を下達した。

一、大本営の企図は対米主作戦の完遂を期すると共に蘇国の非望破摧の為新に全面作戦を開始し蘇軍を撃破し以て国体を護持し皇土を保衛

一三

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

するに在り

二、関東軍総司令官は主作戦を蘇軍に指向し来攻する敵を隨所に擊摧して朝鮮を保衛すべし

右と同様の命令が才五方面軍に対しても発せられた。又支那派遣軍に対しては積極的に関東軍の南滿、北鮮に於ける作戦を容易ならしめる如く作戦を指導せしめ且一部兵力（約六箇師団、六箇旅団）及び軍需品（弾薬六師団会戦分）を速かに滿鮮方面に転用せしめる如く処置するところがあつた。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp